

# 日本民家園だより

特集 布

vol. 98

企画展「東北の手仕事Ⅱ 布」

2023年7月1日(土) ~ 11月26日(日)

画像：デダチオビ (山形県鶴岡市松沢)

# 東北の手仕事 II 布

## はじめに

日本民家園「東北の村」エリアには2棟の古民家が移築されています。

山形県鶴岡市松沢（旧東田川郡朝日村）から移築された旧菅原家住宅は、毎年4メートルほど雪の積もる豪雪地帯にありました。

一方、岩手県紫波郡紫波町舟久保から移築された旧工藤家住宅は、雪こそ少ないものの、米の不作による飢饉も経験してきた寒さの厳しい土地にありました。

このように、住む者に過酷な暮らしを強いた東北の長い冬は、同時に手間と熟練を要する美しい手仕事を生み出しました。特に、素材の保温性を活かした寒冷地ならではの多彩なワラ製品と、生地によっては繊維の採取からはじめ、自ら仕立てる布製品には、日々の生活が育んだ素朴な造形美を見ることができます。

東北の風土が生んだ手仕事をご紹介します本展は、第一部にあたる「東北の手仕事 | わら」に引き続き、第二部として「布」について取り上げます。

## (1) 布とのかかわりかた

かつて、衣類を身にまとうには自ら仕立てなければなりませんでしたが。布地は物々交換等によって手に入れることも少なくありませんでしたが、生地によっては糸を取り、布を織ることから始めました。しかも、繊維の元となる動植物や昆虫も、手間暇をかけて家で育てていたのです。こうした作業は多くの場合、女性たちの仕事でした。

縫い合わせた布はほどくことも容易でしたので、大人用の着物を子ども用に仕立て直したり、掛布団に直したりしてくりかえし使い込んだのです。そして、最後はおしめや雑巾にしたり、細く裂いて裂き織りと呼ばれる布地の横糸として利用したりしました。かつて布はそれほど貴重なものであり、捨てるという選択肢はなかったのです。



カガボン 山形県鶴岡市

野良仕事の際に日除け防止のためにかぶるズキン



ダップリ 山形県鶴岡市

老若男女がはいた普段着

## (2) はたらく

野良仕事<sup>のら</sup>をできるだけ快適に、効率的にこなせるよう、人々は衣類に工夫をこらしました。頭部<sup>おお</sup>を布で覆<sup>ずきん</sup>う頭巾は、作業の際、陽射しや虫、鋭い葉先などから頭や顔を守るためのものでした。袖<sup>そで</sup>を半袖にしたり袖無しにしたりするのは、服の脱着を容易にするとともに、腕を動かしやすくするためでした。また、肌襦袢<sup>はだじゆばん</sup>などの裾<sup>すそ</sup>にウマノリ(縫わずに開けておく部分)を設けるのは、上体<sup>くっしん</sup>の屈伸を自由にするためでした。

野良着には形状の上でこうした工夫が見られるほか、布を重ねて縫い合わせる「刺子<sup>さしこ</sup>」にするなど、耐久性等を高めるため素材の面でも改良が加えられてきました。

## (3) くらす

化学繊維の普及以前、人々は天然繊維をその特性に合わせて活用しながら暮らしました。麻<sup>あさ</sup>は通気性が高く、作業着や夏の衣類に使われました。絹<sup>きぬ</sup>に比べて繊維が太く、家で織りやすかったことも広く使われた理由の一つです。綿<sup>めん</sup>は吸湿性が高く、肌触りがよいこと、さらには水に強くて洗濯も容易だったことから、作業着や普段着、下着として使われました。絹は軽く、保温性にも優れています。高級品のイメージがありますが、普段着としても使われました。羊毛は保温性に優れているため、防寒用の衣類に使われました。羊を飼っていた菅原家には春になると業者が訪れ、刈り取った毛の買取り代として毛糸を置いていきました。

## (4) そだてる

子どもの衣類は、一つ身、三つ身、四つ身と、成長に合わせて着物を仕立て、大人と同様に季節ごとの衣替えも行いました。

菅原家では、農閑期<sup>のうかんき</sup>に女性たちが機織<sup>はたお</sup>りをし、子どもの衣類は普段着もよそ行きも作っていました。大きさが合わなくなれば仕立て直したり、冬はワタイレをほどこし洗ったりして、一枚一枚の着物を大切に使いました。戦時中の物が買えない時代には、実家から古い着物をもらい、それをほどこいて子ども用に仕立て直すこともありました。



ミツミダチノワタイレ 山形県鶴岡市  
子どもが着た防寒具



ノノバタ 岩手県紫波町  
布を織る機織り機

## (5) つくる

衣類は基本的に自家製で、工藤家でも菅原家でも、家族が身に付けるものの多くは家で作っていました。

布製品を作るには、入手した生地を使って仕立てる場合と、原材料を育て、繊維をとり生地そのものから織り上げる場合があります。<sup>めんか</sup>綿花はもともと亜熱帯産植物のため、東北地方は栽培には適していませんでした。そのため、<sup>もめん</sup>木綿については、生地や糸を購入したり、物々交換で入手したりしていました。一方で、菅原家では<sup>ようさん</sup>養蚕を行っていたため、絹については繭から糸を紡ぎ、<sup>つむ</sup>機<sup>はた</sup>で織りました。出荷できない繭も<sup>まわた</sup>真綿にして使いました。また、麻についても栽培から行いました。繊維を取る際に出るクズをオクソといますが、これも捨てることなく布団の中身などに使いました。



オシノイタ (左)・オシノコ (右) 山形県鶴岡市  
麻糸を作る際に不要部分 (オクソ) を削ぎ落とすのに使った

### 〈参考文献〉

- 川崎市立日本民家園 (編) 2007 『旧菅原家住宅 日本民家園収蔵目録 7』川崎市立日本民家園  
川崎市立日本民家園 (編) 2009 『旧工藤家住宅 日本民家園収蔵目録 11』川崎市立日本民家園  
川崎市立日本民家園 (編) 2016 『家で生まれる、家と育つ一子供の習俗と暮らし』川崎市立日本民家園  
高橋九一 1986 『くらしの風土記 岩手に生きる道具たち』法政大学出版局  
竹内淳子 2000 「わた」福田アジオほか (編) 『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館  
戸川安章 1973 『日本の民俗 山形』第一法規  
戸川安章 1982 『北海道・東北地方の民具』明玄書房  
日本民具学会 1997 『日本民具辞典』ぎょうせい  
野口文子 2007 「特集 旧菅原家住宅」『日本民家園だより』63  
民俗学研究所 1955～1956 『改訂総合日本民俗語彙』(1)～(5) 平凡社  
森口多里 1971 『日本の民俗 岩手』第一法規  
柳田国男 1938 『木綿以前の事』創元選書

## 日本民家園だより vol.98

発行: 令和5(2023)年7月1日

川崎市立日本民家園 URL <https://www.nihonminkaen.jp/>

〒214-0032 川崎市多摩区柞形7-1-1 TEL 044-922-2181 FAX 044-934-8652

交通 小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩13分

開園時間 [3月～10月] 9時30分～17時 [11月～2月] 9時30分～16時30分 (入園は閉園30分前まで)

休園日 毎週月曜日(祝日の場合は開園)、祝日の翌日(土日・祝日の場合は開園)、年末年始 ※臨時休園あり

入園料 一般550円、高校・大学生330円(要証明書)

65歳以上330円(川崎市在住の方無料、要証明書)、中学生以下無料



文/はじめに・(1) 渋谷卓男、(2) 小山司、(3)・(5) 真保元、(4) 伊藤朝美  
デザイン/真保元